



福澤育林友の会

東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部

TEL03-5427-1050 FAX03-5427-1190

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~ikurin/>



## 新理事長就任にあたって

(財)福澤記念育林会

理事長 井田 良

このたび、福澤記念育林会の理事長という大役をおおせつかりました。重責ですが、皆様のご支援とご協力をいただき、任務をまっとうしたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。私にとり、「森林」といえば、何よりも、豊かな自然環境の象徴です。また、それは、一朝一夕にできるようなものではなく、とても長い時間の流れを連想させます。一人の人間の時間感覚をはるかに超越した、100年・200年という時間のスケールで眺めた歴史を象徴するもの、それが森林です。

有名な言葉に、「たとえ明日世界が滅びることがわかっても、それでも私は今日、リンゴの木を一本植えるであろう」というものがあります。いろいろなことを考えさせる、含蓄深い、素晴らしい言葉です（宗教改革で有名なマルティン・ルターの言葉ともいわれますが、本当にそうであるのかどうかは、必ずしも明らかではありません）。

私は、この言葉を次のように解釈したいと思います。すなわち、木を植えるとき、その木が成長して果実をつけるその時点には、もはや自分はこの世にいないかもしれない、そうであっても、自分のためにではなく、次の世代の人々のために自分は今日、木を植えたい、こういう気持ちを表現した言葉として理解したいのです。

現在、地球規模でテーマとされているのは、「持続可能性」の問題です。人口問題、資源問題、環境問題、核戦争やテロの危険、生命科学の進歩による生命操作の問題、感染症の問題等々を契機として、近未来における人類の存続そのものがもはや自明のものではなくなっているのです。そこでは、次世代、さらには次々世代の人々との関係で、われわれが従わなければならない「世代間倫理」が問われているのです。それとまったく同じように、今われわれが木を植え、山林を守ることもまた、われわれがもはやいなくなった時に生きている人々のためにわれわれが行うことにほかならないのです。

慶應義塾の先輩たちは、まさにそういう思いをもって、福澤記念育林会を設立し、われわれにこの広大な森林をプレゼントされました。われわれは、先人への限りない感謝の気持ちとともに、これを受け継ぎ、大事に守り、そして後輩たちのために育てていかなければなりません。

私も、皆様とともに、次の世代の人々のために今何ができるかについて、精一杯、考えをめぐらせたいと思っています。お知恵とお力とを貸して下さいますよう、心からお願いする次第です。

## 幼稚舎の杜植林に参加して



今回は、3月の幼稚舎の杜の植林行事(第10回)には、幼稚舎生、研修旅行の参加者のほか、幼稚舎出身の現在 SFC 中等部生2名の総勢45名が参加し、400本のクヌギを植えました。この行事に参加した SFC 中等部生のお母様から頂きましたお手紙をご紹介します。

植林では大変お世話になりました。  
このたびは、厄介なお願い事にも関わらず、ご親切にご対応下さいましてありがとうございました。  
君も娘も植林に参加できたことを大変喜んでおりました。

これまで、参加した際の写真と子どもからの話で幼稚舎の杜での植林作業を想像しておりましたが、今回一緒に行き、娘が行きたがる理由が良くわかりました。地球環境保全とか地球温暖化防止についての言葉による概念化も大切ですが、自分たちでできることが何かを考え、その一助となることに行動で参画するということの体験は、自分もやろう・やれるんだということを実感できて、それはそれはたまらないのだと思います。かけがえのない体験です。

娘は幼稚舎1年生の時に国立極地研究所主催の南極教室に参加したのがきっかけで、地球温暖化問題に関心を持つようになりました。それ以降も南極教室に参加し、通信衛星とテレビ電話会議システムを使って、南極の昭和基地で越冬中の第45次観測隊の方々と画面を見ながら話しをさせてもらったりしておりました。話だけでなく、画面を通し、温暖化の影響を目の当たりにし、それからというものますます温暖化についての関心が強まりました。しかし、対象が南極という代物ですから、実生活との関連を実感するというレベルのものではありませんでした。

しかし、4年生の時にはじめて植林に参加し、自分が行動する植林活動が温暖化防止や地球環境保全につながるということを知り、温暖化防止には子どもの小さな力でも何かできるんだと実感したようです。ちょうど、学校でダムの勉強をしたあとでもあり、森と水資源について関連させて考えられたのだと思います。その後、娘の関心はサンゴの白化現象へと広がりましたが、マングローブが赤土の流出を防ぐことに役立ち、しいてはサンゴの保全につながるという一連のことを考えるに当たっては、やはり植林での体験が大きいものでした。サンゴを守るために何ができるのかを考えた時、赤土の流出を防ぐことも、生活排水を流さないで貰うことも、海に潜ってもサンゴを傷つけないようにして貰うことも、大切なこととはわかっていても、具体的にどうしたら良いかとなると、まだ小学生の娘にはその手段がありません。それでも、やっと一人でもできそうなこととして石垣島での海岸清掃に参加しました。



手をこまねいているよりは、小さなことでも何かすれば地球環境を守れると考えているようで、植林活動に参加するというのは娘にとって大きな意義のあるものでした。

しかし、中学生になり、植林に参加することができなくなってしまい、仕方がないことと諦めかけていたのですが、森先生とお会いした時に思いきってお話させて頂きましたところ、参加のお許しを頂き、それはそれは大喜びでした。あとは、植林の日の学校プログラムがどうなるかでした。

期末テスト後の時間割が発表されたのはギリギリの時期でした。それでも、7日がフリーの日であるとわかり、大喜びで学校から

電話してきました。その日帰ってきた時の嬉しそうな顔といったら、幼稚舎の低学年の頃のような表情でした。幼稚舎のプラスバンドで一緒だった君にも声をかけると即、行きたい!の返事。実は、君はどういう訳か、SFCに入学してからというもの本来の明るさが影を潜めてしまい、1月になってからは益々元気がなくなってお母様も心配しておりました。

その君も植林中からはいつものようなはにかんだ笑顔がみられるようになり、「来て良かった!来年も来たいな!」と。久しぶり



に笑顔が戻った！とお母様も大喜びでした。娘は 君の元気回復の理由は【幼稚舎の杜マジック、植林マジック】だと言い、幼稚舎の頃のような 君に戻ったことを喜んでいました。また、森先生はじめ、皆様には温かく子どもにお声をかけて頂きまして、二人とも慶應義塾の温かみをたっぷり感じとっておりまして、本当に本当にありがとうございました。このような機会をお与え下さいました森先生には心より感謝いたしております。どうか、くれぐれも宜しくお伝え下さいますようお願い申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

## 第8回 「森を愛する人々の集い」

去る6月20日、慶應義塾三田キャンパス北館ホールに於いて、スタジオジブリプロデューサー鈴木敏夫氏による「スタジオジブリを作ったもうひとりの男」というテーマで講演していただきました。

今回の鈴木敏夫氏の講演は、スタジオジブリさんからの内容等の公開はしないで欲しいとの申し出がありましたので、誠に残念ですが非公開とさせていただきます。



## 早生厚子さんを偲んで



3月24日「福沢記念育林会友の会」事務局の早生厚子さんが帰らぬ人となりました。

2月に体調を崩され入院なされたということは聞いていましたが、まさかその一カ月後に訃報を聞くと、思いもかけないことでした。ご主人様からお知らせをいただいた時にはただ呆然とするだけで、亡くなられたという事がどうしても理解できませんでした。お宅にお悔やみに伺い、病気のことを聞いて再び強い衝撃をうけました。2001年から癌と闘っておられたとのこと。「友の会」が発足して一緒にお手伝いを始めたころです。

いつも笑みを浮かべて淡々と仕事をなさっていた姿が目につかび、今まで病気のそぶりなど全く見せず7年間過ごしてこられた彼女の気持ちを思うと切なくて、思わず涙があふれました。ご主人以外には誰にも言わず闘病なさっていた由、彼女の芯の強さには敬服いたしました。

早生さんは主に林野庁とのやり取りを担当してくださり、講演会、理事会、旅行の雑用などは二人で一緒にお手伝いをしておりましたが、なかでも講演会の参加者動員は二人にとって大きな難題でした。毎年100人達成に向け、それぞれの友人知人に手紙を書いたり電話をして参加してもらっていました。「いつか私たちがお誘いしなくても自然に参加者が集まってくれる日が来るといいわね」と二人で話していたものですが、その日が皮肉にも早生さんが逝ってしまった今年の講演会で実現したのです。早生さんが天国から魔法をかけてくださったかのように、お知らせのメールやポスターを貼ったとたん次々に申し込みがあり、200人を超え、お断りする方も出てしまいました。鈴木様の人気の表れではありますが、私には早生さんの力も感じざるを得ませんでした。大ホールを満員にして大成功に終わった今年の講演会、成功の喜びを彼女と分かち合えなかった事は本当に残念でしたが、私の横で「紫乃さん良かったわね」と早生さんが微笑んでくれているようで、鈴木さんへの拍手を送りながら、今まで苦労を共にした彼女への感謝の気持ちもこみあげてきました。

病と闘いながらさわやかに仕事をしてくださった早生さん、ご冥福をこころよりお祈りいたしてしております。

速水 紫乃

## 福澤記念育林基金（平成20年度）

### 【研究支援の研究報告】

「ケモメトリック分光法による国産材のブランド化」  
名古屋大学大学院生命農学研究科；土川 覚氏

各地域で産出される木材のブランド化をはかるためには、さまざまな物性値を非破壊で短時間に正確に測定し、なおかつ原産地を信頼性の高い



手法で保証することが必要となります。本研究では、「ケモメトリック分光法」という新しい手法によってスギ材の産地判別を試みました。これは、近赤外光（波長800 - 2500nm：見えない光です）を木材に照射し、戻ってきた光の特性（スペクトル）を統計学的に解析することで産地を推定しようとするものです。

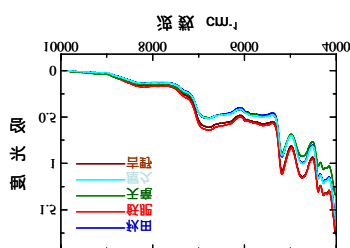


図 1

全国的に有名なスギの産地（秋田県能代地方、静岡県天竜地方、奈良県吉野地方、宮崎県飫肥地方、鹿児島県屋久島）を訪れて各産地でスギ材を収集しました。スギは日本固有の樹木で一属一種の樹木ですが、産地によって特質が異なるとされています。本研究ではこの点に注目し、図1のようなスギ材の近赤外反射スペクトルを解析することによって、産地判別が可能であるかどうかを検討しました。産地によって、微妙にスペクトルが変化していますが、これをさらに統計解析すると、屋久スギと天竜スギの産地正答率は約80%となりました。今後は、強度や化学成分の推定も含めて研究を進めていきたいと思ひます。

## 平成20年度福澤育林友の会収支

会員；244名(内学生・生徒5名)

平成20年度	収入	支出	摘要	
前年度繰越金	1,225,513			
会費	2,025,000		H20年度会費(222名分)	会費の口座 振替について
〃	50,000		H21年度会費(1名分)	
寄附金	140,000		個人寄附	平成21年度会費の 口座振替予定日は 平成21年9月24 日(木)を予定して います。
利息	2,005		普通預金利息	
寄附		2,500,000	(財)福澤記念育林会・育林事業への寄附	
通信費		32,000	会費引落案内通信費	
手数料		28,485	会費引落サービス手数料	
当年度収支	2,217,005	2,560,485		
次年度繰越金	882,033			